

「その時が来る」

ダニエル 12 : 1 - 13

May.16.2021

ダニエル 12 : 1 - 13 (パウポ)

Preface

聖書は私たちに、世の終わりがあることを教えてくれます。

私たちは世の終わりと言いますと、それがいつ来るのかということに関心が行きがちですが、

聖書は、いつ来るのかよりも、終末があるという事実を前にしてどう生きるのかということをやより重要視します。

事実、マタイの福音書を見てみますと、弟子たちがイエス様に「いつ、世の終末が起こるのですか？」と訊くと、「いつ来るのかは、わたしも知らないし、天の御使いも知らないし、誰も知らない。唯一父なる神のみが知っておられる」と、あたかも、終末の時が具体的にいつなのかはそんなに重要ではないかのように答えます。

それよりも、「終末があるという事実」を前にして、「あなたがたはどう生きるのか、どう生きるべきなのか」ということを問うておられます。

これと同じようなことが、死についてです。

聖書は、私たちがいつ死ぬのかということよりも、「死ぬるという事実を知り、その事実を前にしてどう生きるのかが問題だ」と言います。

ダニエル書 12 章で、ダニエルに語られていることも終末についてですが、やはり、いつなのかよりも、終末の時代を生きているという自覚と、信仰者としての信仰の姿勢や態度について言及しています。

そして、これこそダニエル書 12 章の要点でもあります。

先ほど 12 章全体をお読みしましたが、今日は、1 - 4 節までの内容を見ていきたいと思っています。

Part One

ではまず、1 節からもう一度見てみたいと思います。

ダニエル 12 : 1 (パウポ)

ここにある「その時」とは、11 章の流れからしますと、偽キリストに例えられたアンティオコス・エピファネスによって、まことの神を信じるイスラエル民

族が苦しめられたことの終わりとその苦難からの解放の時のように思われますが、この特定の過去の一つの歴史的事実だけを指すのではなく、

むしろ、時代を超えた最終的な世の終末と、その終末に至るまでに信仰者たちが経験する苦難と救いの時を一義的に指していると見るのが自然です。

「その時」という終末に至る時には、信仰ゆえに迫害を受けたり、かつてなかったほどの苦難を通る信仰者のために、御使いのかしらであるミカエルが立ち上がります。

この「立ち上がる」という言葉は、勝利を表す言葉です。

ヨハネの黙示録 12 章でも、ミカエルが悪魔とかサタンとか呼ばれる大きな竜と戦って勝つ場面が記録されていますが、今ここでもミカエルがただ登場するのではなく、「立ち上がる」という言葉をもって、終末に至る時のかつてないほどの苦難と霊的戦いに勝利することを示唆しています。

また、1 節の後半部分に「その時、いのちの書に名の記されている者はみな救われる」という言葉がありますが、この言葉を語り掛けながら、いのちの書という書物の存在を明らかにし、そのいのちの書に名の記されているキリストを信じる信仰者は、苦難や終末を恐れるのではなく、救いの完成が近づいているという希望として受け止めなさい、希望として受け止めることが出来ると言います。

私たちキリストを信じるキリスト者たちにとって、苦難は救いの印であり、前触れです。

「苦難があるから、ああもうダメだ！」でもなく、「え、この世界に終わりが来るの？ ああ恐ろしい！」でもなく、

キリスト者にとって、すべての苦難は救いの完成の兆候であり、罪ある不完全な世界で生きる時に伴うある意味当然の報いや出来事であり、

その一切の苦難が取り除かれ、すべてが新しく造りかえられた世界に入れられる終末は、究極の希望であるから安心しなさいと、教えてくれるわけです。

イザヤ書 9 : 1 - 7 (パワポ)

苦しみを通ったすべての神の民たちは、「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれるみどりごイエス・キリストの誕生と十字架の贖いと復活によって、もうこれ以上一切の痛みも悲しみも傷も重荷も闇も辱めもなく、光を見、光が輝き、喜ぶようになります。

戦場のようなこの不完全な世界で生きるために用いられた私たちの血の汗にじむ、血の汗にまみれた履き物や衣服は、綺麗さっぱり焼かれ、子羊イエスの血

によって洗われた白い衣を身にまとい聖なる国民、選ばれた種族、王である祭司として永遠のいのちを享受する時が来るのです。

だから使徒パウロは、こんな言葉を言っただけです。

ローマ人への手紙 5 : 3 - 5 (パウロ)

ローマ人への手紙 5 : 1 - 2 (パウロ)

Part Two

一般的に苦難は恐れの対象でありますし、避けようとするものです。

勉強すること、仕事をする、余暇を楽しむこと、名誉や権力を得ようとするなど、社会の営みのすべての動機が、「苦難を避けるため」と言っても過言ではないでしょう。

また、すべての宗教の祈りは、「苦難を避けさせてください」というものです。

しかし、使徒パウロに倣うキリスト者の祈りは、「苦難の中にあっても、希望を失わないようにさせてください。苦難を通して私たちの信仰を、なおいっそう鍛えてください。苦難の中に、忍耐をお与えください。」という祈りになるでしょう。

この祈りの内容こそ、私たちキリスト者の時代を超えた祈禱課題ですよ。

ああしてください、こうしてくださいという祈禱課題は尽きませんが、究極の祈禱課題こそ、「苦難の中にあっても、希望を失わないようにさせてください。苦難を通して私たちの信仰を、なおいっそう鍛えてください。苦難の中に、忍耐をお与えください。」ではないでしょうか。

では、なぜこのような祈りが出てくるか？

それは、苦難の中にも神様の御旨、意思、価値があると、神様の善なる御思いがあると信じられるからです。

例えばどんな苦難でも、主は主の御業を着々と進めておられ、主なる神様の究極的な義と善のために、この苦難を用いておられる。

神様は、その究極的な善のために、ダニエル書 12 章にも出てきますが、神なんか認めようとしない悪しき者たちさえも用いておられるし、彼らも神の御手の中にあって統治されているんですね。

私たちは「このパンデミックを取り除いてください、このパンデミックを過ぎ来させてください」とばかり祈りがちですが、たとえこのようなパンデミックであっても、神様の御手は止まることなく働かれていますし、これを持って死ぬる

ことがあったとしても、それはそれで、神様の究極的な義と善を成すために用いられ、必要であるということだけです。

これが信仰ですし、信仰のなせる業ですね。

使徒パウロもピリピ書の中で、「私にとって生きることはキリスト、死ぬことは益で、世を去ってキリストと共にいることの方がはるかに望ましいけれども、まだこの世で生きてやるべきことがあると主に示されているから、生きているだけだ」と、この地上での生に対して執着もなければ、生きるも死ぬもキリストのためであると告白しています。

さらに言うならば、苦難を避けることが私たちキリスト者の目的ではなく、あえて、神の御旨に賛同するためにその苦難に入っていくこともあるわけです。

ダニエルもそうでしたし、ハナンヤ、ミシャエル、アザルヤの3人の信仰の友たちもそうでした。

彼らは苦難を避けようとはせず、神の御旨に賛同し、敢えて燃える炉の中に入り、獅子の穴倉に入っていました。

そこで彼らが体験したのが、神の栄光です。

ここで、少し私自身の話をさせてください。

17年前、韓国の神学校を卒業して土浦めぐみ教会に青年主事として帰ってくる時は、楽しみでしかありませんでした。

「やっとこの（地獄のような、あ、こんなこと言っちゃいけない）辛かった3年間の神学校生活を終えて、日本に帰ることが出来る！ もうこれ以上できない！」という思いに満たされるほどに、大変だった3年間の神学校生活と教会での伝道師としての働きを終えて、めぐみ教会に戻って来れることが楽しみでした。

しかし、3年9か月前にアメリカの神学校を卒業して土浦めぐみ教会に帰ってくる時は、正直、嫌で仕方ありませんでした。

家内には、「そんなに嫌なら、めぐみ教会に戻る必要ないんじゃないの。なんで引き受けるなんて言ったの？ アメリカで暮らす道を探ってもいいし、めぐみ教会じゃない他の教会に行ってもいいし、既存の教会が嫌なら、教会開拓してもいいし、牧師が嫌なら牧師を続けることにこだわらなくてもいいんだよ。」と言われたのですが、こんな確信がありました。

「今この地上で、神様が望んでおられる僕の生きる道は、めぐみ教会に戻って、

清野先生の後めぐみ教会の主任牧師として歩むことだ。もし、この道を拒んだら、幸いにもなれないし、祝福の道を歩むことも出来ないし、僕にとって人生の意味を見出すことも出来なければ、死んじゃうかもしれない」という変な確信がありました。

でもこれまた変な話、嫌で嫌で仕方ありませんでした。

確信があるのに、嫌なんです。

なぜなら、自明の理、火を見るよりも明らか、見るまでもなく、到底私の力では、やり遂げることも生き抜くことも出来ない苦難があるということも確信できたからです。

で、自分の中の天秤にかけるわけです。

神が召しておられるという確信に従うのか、嫌だという自分の確信に従うのか。

これまた、明白ですね。

キリスト者の祝福は、神の召しに従うことです。

たとえそこに明らかな苦難があるとしても、

そこにこそ、祝福があり、喜びがあり、笑顔があり、恵みがあり、希望があり、成長があり、救いの完成があり、いのちの書に名が記されていることをこの上ない栄誉と思える道があるのです。

だから、めぐみ教会に帰ってきました。

なおも、毎日、苦難はあります。

ほぼ毎日、「ああ、牧師辞めようか」と思ってしまうですが、

祝福があり、喜びがあり、笑顔があり、恵みがあり、希望があり、成長があり、救いがあり、いのちの書に名が記されていることをこの上ない栄誉と思える道を歩んでいるという確信があるため、今もこうして、ここに立っています。

今の私の生きる道は、土浦めぐみ教会の牧師しかありません。

他の教会の牧師をやるなんてことは、今のところ全く考えられませんし、もし土浦めぐみ教会の牧師を辞めることがあったら、それは牧師自体を辞めることだと思うほどに、苦難はあっても、この道に確信があります。

なぜなら、この苦難が希望の終末に繋がり、神の御旨に賛同するために通っている苦難だという確信が与えられているからです。

Part Three

2節に行ってみましょう。

ダニエル 12 : 2 (パワポ)

終末における肉体の復活について記しています。

ちりの中から復活して永遠のいのちに入る人たちと、永遠の罰に処せられる者たちがいると言います。

創世記に書かれている通り、私たちは土のちりから神の手によって尊く創造された者ですが、罪ゆえに、死をもって再びちりに帰ってしまう運命を被ってしまっています。

しかし、終末というその時には、今一度新たな肉体を与えられます。

ただし、永遠のいのちに至る肉体と、永遠の滅び、永遠の恥辱、永遠の苦しみに至る肉体とに分けられます。

そして、永遠のいのちに至る者たちが、どのようなになるのかと言いますと、3節。

ダニエル 12 : 3 (パワポ)

新たな肉体を与えられ、永遠のいのちへと導かれた者たちのことを、「賢明な者たち」、または「多くの者を義に導いた者」と言います。

賢明な者たちとは、言葉を換えますと、知恵のある者たちということです。

そして聖書の言う知恵とは、

箴言 1 : 7 (パワポ)

箴言 9 : 10 (パワポ)

つまり、神を畏れ敬うことこそが知恵であり、神を畏れ敬う者こそが知恵者です。

どんなに知恵を説き、知識を蓄えたところで、もしそこに神を畏れ敬うことがなければ、それは、知恵でもなければ知識でもなく、ただのちりあくたです。

知恵は、決して、父、子、聖霊の三位一体なる神様と離れたくても離すことの出来ないものです。

世は神のいない知恵を追求しますが、突き詰めていきますと、神のいない知恵なんてものは元々存在さえしないのです。

神を認めないところに知恵があると言うならば、それこそ、人間が編み出した妄想です。

お金をいっぱい稼ぐ人、権力の頂上に登り詰める人、人気絶頂にある人たちは知恵者ですか？

もしそこに、主イエス・キリストを中心に据える信仰がないならば、それは真の知恵者ではなく、人間がつくり上げた、いつか消えてなくなる知恵を装ったちりあくたです。

今、ダニエル書で言っています賢明な者たちとは、神を認め、イエス・キリストを中心に据えて生き、神のお与えなさる判断力、分別力、洞察力をもって生きる人たちのことです。

Part Four

また、多くの人たちを義に導く人とは、どんな人のことでしょうか？

正義を叫ぶ人でしょうか？

社会運動をしている人でしょうか？

人権問題に取り組んでいる人でしょうか？

正しいと思われることをしている人でしょうか？

じゃ、何が正しいことなんでしょうか？

私たちがよく分かっていることが一つあります。

それは、正しい人なんか、誰一人としていないということです。

ローマ人への手紙 3：10－18 (パウロ)

私たち人間、神を信じているからと言って、正しい人であるのでもなく、正しい道を進めるわけでもありません。

私たちの中にいてくださる神のみが、キリストの御霊のみが、正しいお方です。

だから、私たちはその唯一正しいお方の前に、遜り、謙遜になるしかないんですね。

私が正しいなんてことは、主張できないはずなんです。

なのに、「神を信じているから私こそ正しいんだ」と思い、ケンカし争ってしまいます。

これの厄介なところが、神というバックを自らの中で根拠にして、自分の正しさに確信をもって争うので、終わりがありません。

死ぬほど争うのではなく、死ぬまで、いや死んでも争うのかもしれないと思ってしまうほどに、自らの非を認めることが出来ません。

これが問題ですね。

私がよく家内に怒られるのが、「あなた自分だけが敬虔なクリスチャンだと思って、自分のことを正しいと思っているけど、全然違うからね。」ということです。

カチンとは来ますが、全くもってその通りです。
ぐうの音も出ません。

では、人を義に導くって何でしょう？

私こそ正しいから、私の方に向かせ、私の方に導くということでしょうか？
違いますよね。

私たちが信じるまことの神へと向かせ、主イエス・キリストへと導くこと、これが人を義に導く生き方です。

私たちは神を、イエス・キリストを信じていると言いながら、ともすると、神から遠く離れ、背を向け、背を向けていることにさえ気付かずに、自分の正しさに頼り、転び倒れるから、

朝起きたら祈り、御言葉を食し、時あるごとに御言葉を思い出し、思い巡らしながら、私が導く人生ではなく、神が導き、神の言葉が導く人生を生きようと、信仰の葛藤をしながら生き悶えます。

まず私自身を義へと導こうと努め、その生き方を通して子供たちを義へと導き、家族を義へと導き、隣人を義へと導こうと生きようとする人のことを、
ダニエル書では「多くの者を義に導いた者」と言います。

まさにダニエルがそうですね。

そして、この多くの者を義に導く人たちと、主を畏れ敬う賢明な人たちこそ、新たな肉体を与えられ、永遠のいのちへと導かれた者であり、大空に世々限りなく輝く星のような存在だと言います。

イエス様は、山上の垂訓で、「まことの神を信じ、主イエス・キリストを我が救い主として生きる者たちは、世の塩であり、光だ」と仰いました。

光のようになるだろうでもなく、段々と少しずつ輝き始めるだろうとも仰らず、「光だ！」と断言されました。

光になるために努力が求められるのではなく、キリストを信じたものこそ、この世の光だと仰います。

この闇の満ちた世界にあって世を照らすのは、キリストを信じ、神を畏れ敬う

人であり、その人ゆえに人々が義なる方へと導かれ、方のもとに導く人だと、
その人ゆえに世が明るくなり、闇が立ち退き、ひいては、終末をもって訪れる
新しい世界にあっても光の子として永遠に生きると言うのです。

Part Five

そして、4節。

ダニエル 12 : 4 (パワポ)

「ここまで語られたことを秘め、封じておけ」とダニエルは命じられますが、
ここで言う「秘め、封じておけ」とは、「隠して誰にもわからないようにせよ」
という意味ではなく、「しっかり保管し、この御言葉を反芻しながら、この御言
葉の成就を見守りなさい」という意味なんです。

ヨシュア記の最初に「主の言葉を昼も夜も口ずさみなさい。これが真の繁栄へ
とつながるから」教えていますが、私たちが良く知っている詩篇 1 篇でも同じよ
うなことを詠っています。

詩篇 1 : 2 - 3 (パワポ)

ここの口ずさむとは、反芻するという意味です。

つまり、神の言葉に何度も何度も立ち返り、味わい、味わい、また味わい、飲
み込んで栄養分にすることということです。

自分のことを覚えるのでもなく、自分の信念やポリシーを確認するのでもな
く、自分のことを思い巡らすのでもなく、自分のことを高めようとするのでもな
く、自己啓発自己開発に浸るのでもなく、自分に注目を集めさせるのでもなく、
神の言葉を反芻し、その成就を見守ることにこそ、繁栄があるのです。

もちろん、そこには苦難が伴います。

聖書を生きることは幸いなことですし、祝福ですが、必ず苦難が伴います。

しかし、その苦難は苦難が目的ではありません。

永遠の癒し、休息、栄光に至らしめることが目的です。

そのために、私たちの人生の中心にキリストに居ていただき、その方の御旨を
問いながら生きることが求められます。

詩篇 1 : 1 の御言葉を見ますと、

詩篇 1 : 1 (パワポ)

とありますが、ここの「悪しき者のはかりごと」の「はかりごと」とは原文でエチヤという言葉なんですが、何かこうとてつもない大きな悪のことを言っているのではなく、本来はアドバイス・助言という意味で、“認識できない程に常識化した私たちの生活奥深くに根付いている考え方”を意味しているんです。

例えば、幸せになるためにはお金が必要だとか、
先ず何よりも大事なのは人間関係であり、その中でも家族を大事にすることこそ大切だとか、
自分を信じ、自分のことを大切にすることだとか、
誰が聞いても間違っているとは思えないほどに常識化した概念です。

これに対して、イエス様は、貧しいものは幸いですと仰ったり、
人間関係よりも神との関係が大事で、神との関係のために家族さえも捨てなければならぬことがあると仰ったり、
自分を信じ大切にするのはではなく、自分を捨て、自分の十字架を負って、イエス様に従ってきなさいと仰いました。

もちろん、貧しいことを礼賛し、人間関係を軽視し家族を軽んじ、自分のことを痛めつけなさいと仰っているわけではありません。

まことの幸せ、まことの人間関係や家族関係、まことに自分を労わることは、神との関係にあってなされるものなんだということを教えてくださっているわけですね。

Conclusion

私たちがダニエルの人生を通して教えられることは、御言葉を反芻しながら、その御言葉の成就を見守る生き方には苦難が伴うけれども、真の繁栄が待っており、最後の時に勝利者となるということです。

世が説く、“認識できない程に常識化した私たちの生活奥深くに根付いている考え方”に従って生きて行くのではなく、神の解く言葉にすがって生きていきましょう。

そこにこそ、救いがあり、いのちがあり、知恵があり、輝きがあり、義があり、神がともにいてくださいます。

お祈りいたします。

祝祷：ダニエル 12：3